

島根県邑智郡瑞穂町

長源地本谷城跡発掘調査報告書

特別高圧送電線路中国第二中幹線鉄塔
建設工事に伴う発掘調査



1997年2月

島根県邑智郡瑞穂町教育委員会

序

瑞穂町では現在までに30数余の山城や砦跡が確認されておりますが、文献等で築城者や築城、廃城時期が推定できる城跡は山羽（富永）氏の二ツ山城跡や高橋（本城）氏の本城跡等僅かであり、多くはその詳細について不明であります。

今回発掘調査を実施した長源地本谷城は、かねてより中国電力株式会社が計画を進められていた50万kV中国第二幹線新設工事に先立ち遺跡の分布調査により発見された山城であります。調査範囲は送電線の鉄柱が建設される限られた範囲で、山城跡の全容は不明ですが調査の結果をここに報告致します。本報告書が山城研究の一助になれば幸いであります。

なお、今回の調査にあたりご指導いただきました関係機関や、調査を円滑に進めるため多大なご協力をいただきました中国電力株式会社をはじめ関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成9年2月

瑞穂町教育委員会
教育長 澤田 隆之

例　　言

1. 本書は島根県邑智郡瑞穂町大字八色石字城平1229-1番地における特別高圧送電線路中国第二中幹線鉄塔建設工事に伴い、平成8年7月8日から7月29日にわたって実施した長源地本谷城跡発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は中国電力株式会社松江支店から委託を受けて、瑞穂町教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆・編集は森岡弘典が行った。
4. 本書掲載の図面作図写真撮影は、森岡弘典及び藤田眞弘が行った。
5. 本書に掲載した地形図（第1・3図）は建設省国土地理院長の承認を得て（承認番号平成7年中復第276号）同院発行の25000分の1を複製した瑞穂町管内図を使用した。第4図は農村総合整備事業により瑞穂町が作成した10000分の1管内図を使用した。
6. 本書11頁の地形図に表示したX軸Y軸は国土法による第III座標系の軸方向である。地形測量図・造構図の矢印は真北を示している。
7. 地形測量は㈱荒谷建設コンサルタントに委託した。

長源地本谷城跡発掘調査報告書

目 次

序

	頁
I. 調査に至る経緯および経過	1
II. 長源地本谷城跡の位置と環境	4
III. 調査の概要	8
IV. まとめ	12

図版・挿図目次

図版第1	a. 長源地本谷城跡空中写真（南東から） b. 同（東から）
図版第2	a. 長源地本谷城跡遠景（南から） b. 同近景（東から）
図版第3	a. 調査前全景（北西から） b. 同（南から）
図版第4	a. 第1削平地（西から） b. 第2削平地（同）
図版第5	a. 第3削平地と第4削平地（西から） b. 第5削平地と第6削平地（同）
図版第6	a. 第6削平地と第7削平地（西から） b. 第7削平地と第8削平地（同）
図版第7	a. 第8削平地（西から） b. 発掘状況（南から）
図版第8	a. 発掘状況（北から） b. 第6削平地断面図（西から）
図版第9	a. 長源地本谷城跡から赤羽城跡を望む（北東から） b. 発掘調査風景

	頁	
第1図	瑞穂町地内送電線ルート図 (1:50000)	3
第2図	瑞穂町域と長源地本谷城跡位置図	3
第3図	長源地本谷城跡付近遺跡分布図 (1:25000)	6
第4図	長源地本谷城跡付近地形図 (1:10000)	7
第5図	第1・2削平地実測図 (1:150)	8
第6図	第3・4・5削平地実測図 (1:150)	9
第7図	第6・7削平地実測図 (1:150)	9
第8図	第8削平地実測図 (1:150)	10
第9図	削平地配置図・縦断面図・横断面図	10
第10図	発掘調査後地形測量図 (1:200)	11
第11図	長源地本谷城縄張図	12

I. 調査に至る経緯および経過

今回調査を実施した長原地本谷城跡は、島根県邑智郡瑞穂町大字八色石字城平1229-1番地に所在する中世の山城である。木山城に関する記録や伝承は全く残っておらず、また地元においても今までその所在は知られていなかったが、中国電力株式会社の50万V中国第二中幹線鉄塔建設に先立って、町内鉄塔建設予定地内の遺跡分布調査を実施したところ、その存在が明らかとなった山城跡である。現況の表面観察で山頂部分に土郭と推定される比較的広い平坦面を有し、そこから南へ派生する複数の尾根上に複数段の小規模な削平地が認められた。計画によると、土郭部分は工事区域外になるが、尾根上の小規模な削平地の一部が工事の影響を受けることが判明した。直ちに中国電力株式会社松江支店と協議を開始したが、本鉄塔設置予定地を変更するためには、隣接する鉄塔設置場所の変更も余儀なくされるため変更は非常に困難であり、また電力の安定供給という公共性を勘案すると計画の変更は困難であり、当初計画での工事も止むをえないとの結論に達し平成8年7月8日から7月29日にわたり次の体制で発掘調査を実施した。

調査主体 瑞穂町教育委員会

調査員 森岡弘典（瑞穂町教育委員会文化財係長）

藤田暁弘（瑞穂町教育委員会主任主事）

調査指導 河瀬正利（広島大学文学部助教授）

吉川 正（島根県文化財保護指導委員）

西尾克巳（島根県文化財課埋蔵文化財係長）

広江耕史（島根県文化財課文化財保護主事）

事務局 澤田降之（瑞穂町教育委員会教育長）

河野義則（瑞穂町教育委員会教育課長）

星野暢子（瑞穂町教育委員会教育課長補佐）

平川 進（瑞穂町教育委員会教育課長補佐）

整理作業 市山真弓（瑞穂町教育委員会）

発掘作業 石川義明、今田徳郎、岩根諭、上川義夫、漆谷勉、佐藤三郎、洲浜軍太郎、高川秀夫、

高梨数男、戸津川里美、戸津川孝夫、平川正寅、久光花枝、古川健二、野田正治、

松島利郎、森田ユキエ

なお、発掘調査を円滑に進めるために中国電力株式会社松江支店奥井洋之氏、小林晃氏、鶴荒谷建

設コンサルタント藤本隆氏には多大なご協力とご配慮をいただいた。記して謝意を表したい。

調査日誌抄

1994（平成6）年

- 3月17日 中国電力㈱松江支店から50万V中国第二幹線鉄塔建設予定地内の埋蔵文化財分布調査の依頼がなされる。
- 6月15日 分布調査（鉄塔建設予定地141.142.147～149地点）。
- 6月30日 分布調査（“143.144地点）。
- 7月1日 分布調査（“145～153地点）。調査の結果153.154地点が山城跡の可能性があるので落葉後再調査を実施することとする。

1995（平成7）年

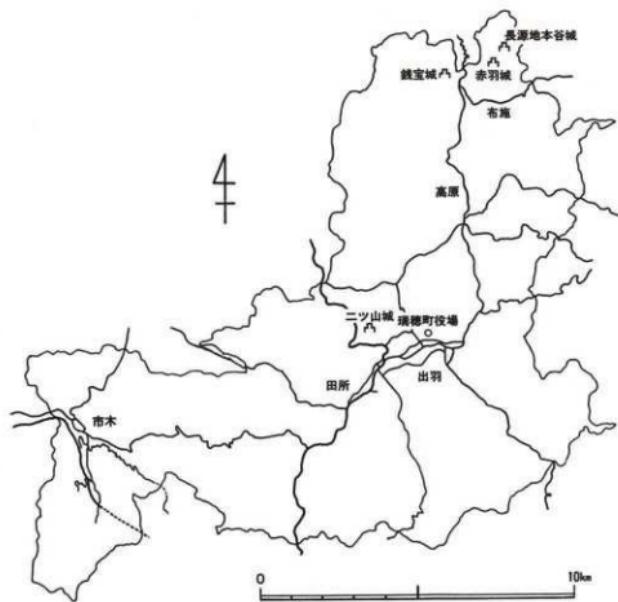
- 4月26日 153.154地点再調査の結果、154地点に小規模の人工的な平坦面が認められた。
- 10月2日 島根県文化財保護指導員吉川正氏と教育委員会による現地精査の結果、山城跡であることが明らかとなった。
- 10月13日 文化財保護法第57条第1項に基づき遺跡の発見届けを文化庁に提出する。
- 12月18日 中国電力㈱松江支店より文化財保護法第57条第2項に基づき埋蔵文化財発掘の届けが文化庁に提出される。

1996（平成8）年

- 6月3日 川本農林振興センターに保安林内作業許可申請提出。
- 6月10日 保安林内作業許可。
- 6月13日 伐操作業開始。
- 6月17日 文化財保護法第98条第1項に基づき発掘調査の通知を文化庁に提出。地形測量開始。
- 7月8日 木口より発掘調査を開始する。調査機材を搬入し、セクションベルトを設定し、調査区最上段より表土除去作業を開始する。
- 7月10日 昨日に続き調査を実施。
- 7月15日 天候不順で中止していた表土除去作業を開始する。鉄塔建設関係者現場観察（3名）。
- 7月16日 概ね表土除去を終了する。調査区内で小規模な削平地8ヶ所を検出する。
- 7月17日 第1削平地より順次精査作業を開始。
- 7月18日 前日に引き続き精査作業。
- 7月22日 セクションベルトを残してほぼ完掘。写真撮影の障害になる木根の除去作業。
- 7月23日 セクションベルトの実測、セクションベルトの除去作業。
- 7月24日 セクションベルトの除去作業および各削平地の精査。
- 7月25日 各削平地の精査および遺構の写真撮影。
- 7月26日 各削平地の断面図調査。
- 7月29日 検出した削平地の実測。調査機材を撤収し現地調査終了。
- 8月28日 現地説明会開催の予定であったが、雨天のため急きょ布施公民館でスライドフィルムにより発掘調査報告会を実施。参加者10名。



第1図 瑞穂町地内送電線ルート図（1:50000）鉄塔番号154は長源地本谷城跡



第2図 瑞穂町域と長源地本谷城跡位置図

II. 長源地本谷城跡の位置と環境

島根県邑智郡瑞穂町は、島根県のほぼ中央部の邑智郡南部に位置する。南西には標高600~800mの中国脊梁山地が連なり、山地を境として広島県と接している。

今回調査を実施した長源地本谷城跡は、瑞穂町の最北部に位置する瑞穂町人字八色石字城平1229-1番地の尾根上に所在する中世の小規模な山城である。この場所は本米は八色地区に属していたが、大正年間に布施地区が集落の共有林として買収して以来布施地区に編入され現在に至っている。

長源地本谷城跡は瑞穂町役場から約18kmの距離にあり、主要地方道瑞穂赤来線を経て長源地林道終点付近で城跡の直下に到着する。ここまで車で約35分である。下車して急斜面を約10分登ると標高509mの長源地本谷城跡に至る。頂上に立つと、南西約2km先に錢宝城跡、同じく谷を挟んで約500m先には赤羽城跡を望むことができ、東に転じると約1.6kmの距離で人和村の宮内城跡や宮内集落を望むことができる。これらの山城跡は川本町の温泉城を拠点に当方に勢力を誇った小笠原氏関係の城跡と伝えられている。また南側眼下には布施盆地の一部が望まれるが、周囲の山に遮断されてそれ以外の集落を望むことはできない。山城跡の西側谷筋は通称奥谷と称され、布施地区や大和村宮内地区から川本町の笠取、細平、矢谷地区を経て川本に至る古道と言われ、交通の要衝に立地している山城であると言える。

ところで瑞穂町内の遺跡は『島根県遺跡地図II（石見編）』³や『瑞穂町内遺跡分布図』²によれば、現在のところ約550ヶ所以上確認されている。その多くが中近世の製鉄遺跡であるが、時期的には旧石器時代から歴史時代に至るものがある。旧石器時代の遺跡では、横道遺跡（高見）⁴や荒模遺跡（岩屋）があげられる。また、近年中国横断自動車道の工事に先行して調査された堀田上遺跡（市木）⁵でも旧石器時代に遡る石器が確認されている。横道遺跡は1982年の詳細分布調査による、丘陵頂部において始良Tn火山灰の下から流紋岩製の石核、剥片類が出土している。遺構など明らかではないが、後期旧石器時代前半の石器群が存在すると思われる。

つぎに縄文時代の遺跡では、前述の横道遺跡や中国横断自動車道の工事に伴って調査された郷路橋遺跡（市木）⁶、堀田上遺跡をはじめ町内各地で相当数の遺跡が明らかになりつつある。

弥生時代の遺跡には、牛塚原遺跡（上亀谷）⁷、順庵原遺跡（下亀谷）⁸、馬場山遺跡（下亀谷）⁹、長尾原遺跡（淀原）¹⁰、野田西遺跡（上亀谷）¹¹などがあり、出羽川の南側に位置する比高約10~30mの丘陵部をはじめとして、流域各地に分布するようになる。1991年に発掘調査がなされた馬場山遺跡では、当地方で初めての弥生時代後期の掘立柱建物群が確認されている。また、この馬場山遺跡、順庵原遺跡に隣接して、弥生時代後期の四隅突尖壙埴輪墓の順庵原1号墓が築かれている。

古墳時代になると遺跡はさらに増えてくる。集落関係の遺跡では、長尾原遺跡、順庵原遺跡、宇山遺跡（上原）、倉谷遺跡（高見）、野田西遺跡、川ノ免遺跡（山田）、狼原遺跡（和田）などがあり、古墳では大原峠古墳（布施）や鶴淵古墳群（鶴淵）、杉谷古墳群（下亀谷）等がある。

このほか、古墳時代から奈良、平安時代にいたる須恵器の窯あとも数多く確認されており、島根県でも有数の須恵器の生産地として注目されている。

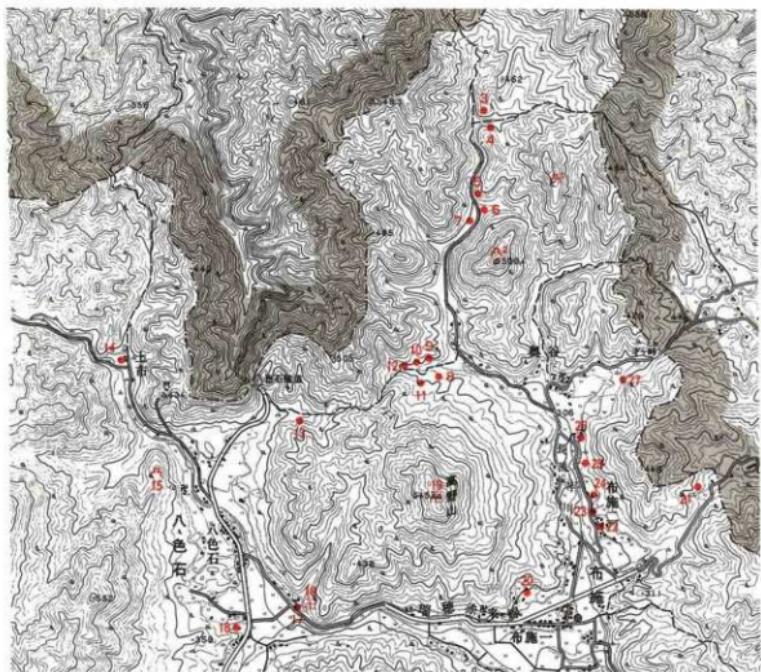
歴史時代の遺跡では、古代の須恵器窯跡群のほか、中世の山城や中世の製鉄遺跡がある。山城

では長源地本谷城跡や赤羽城跡、錢宝城跡の他に鎌倉時代に富永（山羽）氏が築城したと言われる二ヶ山城跡（鶴淵）や宇山城跡群（毛城、赤城、白鹿城、信友城、樹光城、土俵城）、高橋（本城）氏の本城跡（下田所）、別当城跡（和田）、琢道城跡（高見）⁹、吉川氏関係の桜尾城（市木）や福屋・周布氏関係の高城等現在32ヶ所の山城跡や砦跡の所在が確認されている。その他にも山城跡や砦跡と伝えられているものが数ヶ所分布している。

つぎに中近世の製鉄関係遺跡では、製鉄場である鉄跡や大鋤冶屋跡が数多く分布する。その数は300ヶ所以上に及び今後調査が進めば500ヶ所をこえると推定される。また、砂鉄採集の鉄穴場跡、切羽跡は瑞穂町内全域に分布しており、製鉄が盛んに行われていたことがうかがえる。その豊富で良質な鉄資源を背景に中世から近世にかけて多くの刀工が存在していたことが知られている。その中には相州正宗十哲の一人初代出羽直綱など著名な刀工も輩出している。また、豊富な鉄資源は刀工のみならず、在地豪族にも大きな魅力であり群雄割拠する豪族が鉄をめぐる争奪を繰り返していたことも想像に難くはない。近世になると「出羽鋼」と呼ばれる良質の鋼を産出し全国に供給していたことが知られ、長源地本谷城跡の山麓にも大規模な長源地鉄跡がある。

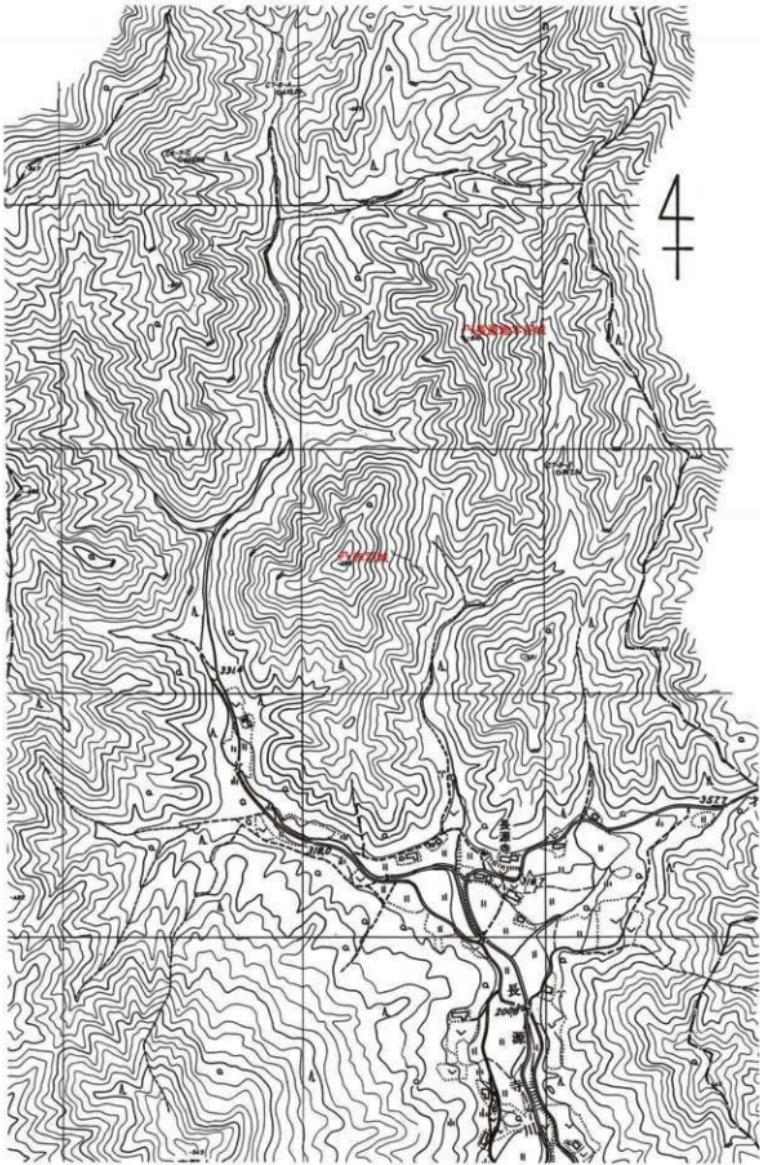
註

- (1) 川本町教育委員会「川本町誌歴史編」1997年。
- (2) 島根県教育委員会「島根県遺跡地図(石見編)」1992年3月。
- (3) 瑞穂町教育委員会「瑞穂町遺跡分布図 I・II・III・IV・V」1985・1986・1990・1991・1992年。
- (4) 河瀬正利編「横道遺跡—群岡分布調査概報—」瑞穂町教育委員会1983年。
- (5) 島根県教育委員会「主労地八重浜田八重河原跡特殊改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」塩田上・今佐巣山・米屋山遺跡／調査—I 1991年3月。
- (6) 島根県教育委員会「中国横断自動車道島根浜田線建設予定期内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ」1991年3月。
- (7) 前掲註(5)。
- (8) 瑞穂町教育委員会「いにしえの瑞穂 水明カントリークラブ内埋蔵文化財発掘調査報概報—」1995年3月。
- (9) 瑞穂町教育委員会「駒蛇山遺跡発掘調査報告書」1995年。
- (10) 瑞穂町教育委員会「馬場山遺跡発掘調査概要書」1991年。
- (11) 瑞穂町教育委員会「長尾原遺跡発掘調査報告書I」1994年3月。
- (12) 前掲註(8)。
- (13) 門脇俊彦「駒座原1号墳について」『島根県文化財調査報告書』第7集 島根県教育委員会1971年。
- (14) 門脇俊彦「農免道路新設に伴う長尾原遺跡及び長尾原1号墳調査概報」島根県川本農林土木事務所1969年2月。
- (15) 前掲註(8)。
- (16) 瑞穂町教育委員会「川ノ免遺跡発掘調査報告書」1996年3月。
- (17) 瑞穂町教育委員会「駒鶴4号墳他発掘調査報告書」1994年3月。
- (18) 瑞穂町教育委員会「琢道城跡発掘調査報告書」1992年3月。
- (19) 島根県教育委員会「中国横断自動車道広島浜田線建設予定期内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ」では「桜尾城跡」として調査報告がなされているが、瑞穂町遺跡分布図IV¹⁰では高城跡として周知されている。



第3図 長源地本谷城跡付近遺跡分布図 (1:25000)

- | | | |
|---------------|----------------|-------------|
| 1) 長源地本谷城跡 | 10) 布施銭宝谷 5号鉢跡 | 19) 西善寺跡 |
| 2) 赤羽城跡 | 11) 布施銭宝谷 3号鉢跡 | 20) 森田大鐵冶跡 |
| 3) 長源地遺跡 | 12) 布施銭宝谷 1号鉢跡 | 21) 大原坪古墳 |
| 4) 長源地 4号鉢跡 | 13) 八色石銭宝谷鉢 | 22) 岡製鐵遺跡 |
| 5) 長源地大鐵冶跡 | 14) 上市鉢跡 | 23) 鉢ヶ原鉢跡 |
| 6) 長源地 3号鉢跡 | 15) 銭宝城跡 | 24) 小ヶ瓦窯跡 |
| 7) 長源地 2号鉢跡 | 16) 古酒屋セド鐵治屋跡 | 25) 鐵治屋野鐵治跡 |
| 8) 布施銭宝谷 2号鉢跡 | 17) 八色石經塚 | 26) 鐵治屋古墓 |
| 9) 布施銭宝谷 4号鉢跡 | 18) 西光寺跡 | 27) 別当大鐵治屋跡 |



第4図 長源地本谷城跡付近地形図 (1:10000)

III. 調査の概要

事前の分布調査で20数段の小規模な平坦面を確認したが、主郭と推定される標高509mの頂上部は鉄塔建設予定地外であり調査から除外した。頂上から南へ派生する尾根は瘦尾根で東西は急峻な傾斜となっている。この尾根上が建設予定地となり、東西約11m、南北37mの範囲で363m²を発掘調査した。

検出した平坦面は便宜上調査区内最高地点から順次1削平地～8削平地と呼称した。調査に先立つて尾根中央部を南北に幅50cmのセクションベルトを設定し、東西に直行して形状を勘査しながら2本のセクションベルト配置した。

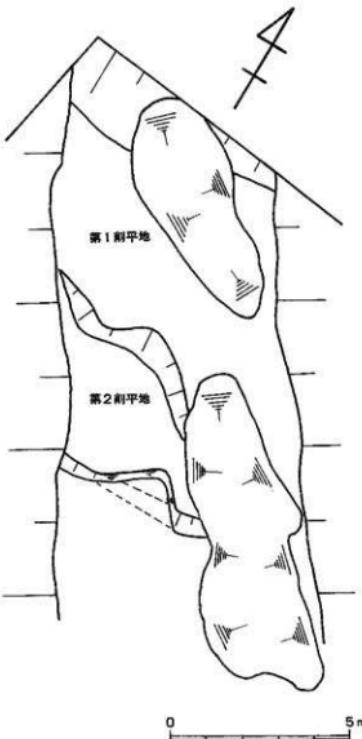
厚さ約10～20cmの表土を除去すると地山面となる。尾根筋方向は地山を削りだしているが、東西方向は一部盛土により平坦面をつくりだしている。各削平地とも自然地形を僅かに加工しただけの小規模なもので、周囲には堀切や堅堀、土塁などの防備施設は認められない。今回の発掘調査では土器や陶磁器等の遺物や、柱穴、柵列跡等は全く検出されなかった。次に各削平地の調査概要について述べておきたい。

1. 第1削平地（第5図・図版第4a）

主郭と推定される頂上平坦面から約3.5m下がった標高505.5mに位置し、地山を27°の傾斜で削りだしている。本削平地東側は近年の立木伐採時の搬出の際索道により破壊されており元の形状は不明であるが、不整形な方形を呈し、東西6.0m、南北最大長約9mの規模であると推定される。平坦面は縁辺部にかけて僅かに傾斜しており、現存面積は26.7m²である。

2. 第2削平地（第5図・図版第4b）

標高505.0mに位置し、第1削平地との比高差は約50cmで地山を約15°の傾斜で削りだして平坦面をつくっている。東側半分は第1削平地同様木材搬出の際破壊されており詳細は不明である。現存面積は11.6m²で縁辺部にかけて僅かに傾斜している。



第5図 第1・2削平地実測図 (1:150)

3. 第3削平地（第6図・図版第5 a）

標高504.3mに位置し、第2削平地との比高差は約70cmで地山を約20°の傾斜で削りだして平坦面をつくっている。東側約1/3は第1・第2削平地と同様木材搬出の際破壊されている。現存面積は12.5m²で、第1・第2削平地同様縁辺部にかけて僅かに傾斜している。

4. 第4削平地（第6図・図版第5 a）

標高503.7mに位置し、第3削平地との比高差は約60cmで地山を約18°の傾斜で削りだして平坦面をつくっている。北東側の一部が第1～3削平地同様一部が木材搬出の際破壊されている。平面形は一月日状を呈し、東西方向に最大幅5.7m、尾根筋方向へ3.3mで平坦部の面積は15.4m²である。第1～3削平地同様縁辺部にかけて僅かに傾斜している。

5. 第5削平地（第6図・図版第5 b）

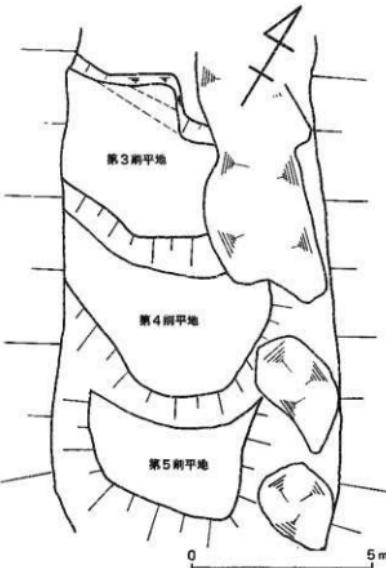
調査区内の削平地では最も規模で、標高503.3mに位置し第4削平地との比高差は40cmで地山を約12°の傾斜で削りだして平坦面をつくっている。平面形は第4削平地同様三日月状を呈しており、東西方向に最大幅4.4m、尾根筋方向に2.5mで面積は9.8m²である。

6. 第6削平地（第7図・図版第5 b）

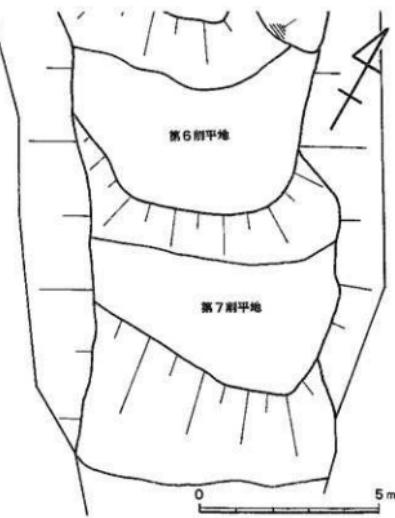
標高502.4mに位置し、第5削平地との比高差は90cmで地山を約23°の傾斜で削りだして平坦面をつくっている。平面形は一月日状を呈し、東西方向に最大幅6.8m、尾根筋方向に3.4mで本調査区内では最も大きい削平地で面積は22.2m²である。

7. 第7削平地（第7図・図版第6 a）

標高501.6mに位置し、第6削平地との比高差は80cmで地山を約20°の傾斜で削りだして平坦面をつくっている。平面形は一月日に近い不定形な方形を呈しており、東西方向に最大幅6.8m、尾根筋方向に3.6mで面積は20m²である。



第6図 第3・4・5削平地実測図 (1:150)



第7図 第6・7削平地実測図 (1:150)

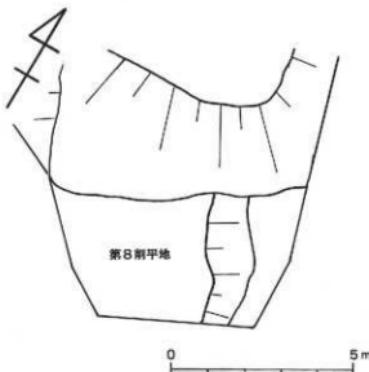
8. 第8削平地 (第8図・図版第6 b, 7 a)

標高500.4mに位置し、第7削平地との比高差1.2mで地山を約16°の傾斜で削りだして平坦面をつくっており、東側に小規模な平坦面が認められる。検出した削平地は調査区外に広がっており平面形や規模については不明である。

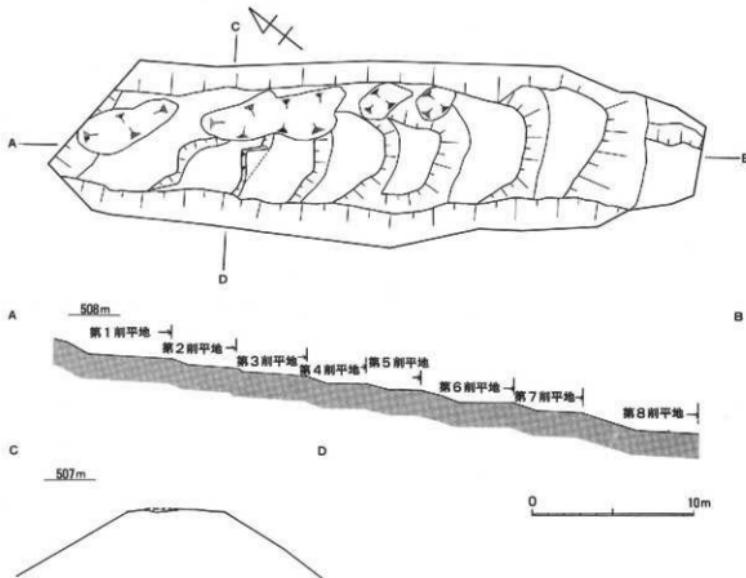
9. 小結

今回の調査は、主削平地部より派生する尾根上の限られた範囲の調査で山城跡の全容を明らかにすることが出来なかった。

調査によって小規模な8つの削平地を確認したが、遺物や建物跡、柵列等の工作物は全く検出されなかった。各削平地の構造も加工はほとんどされておらず、平坦面も不整形できわめて簡略で短時間につくられた山城と推定された。これらのことから、この山城は兵站基地のような陣城ではなく、戦闘の最前線の見張り所や砦のような山城であったと推定される。

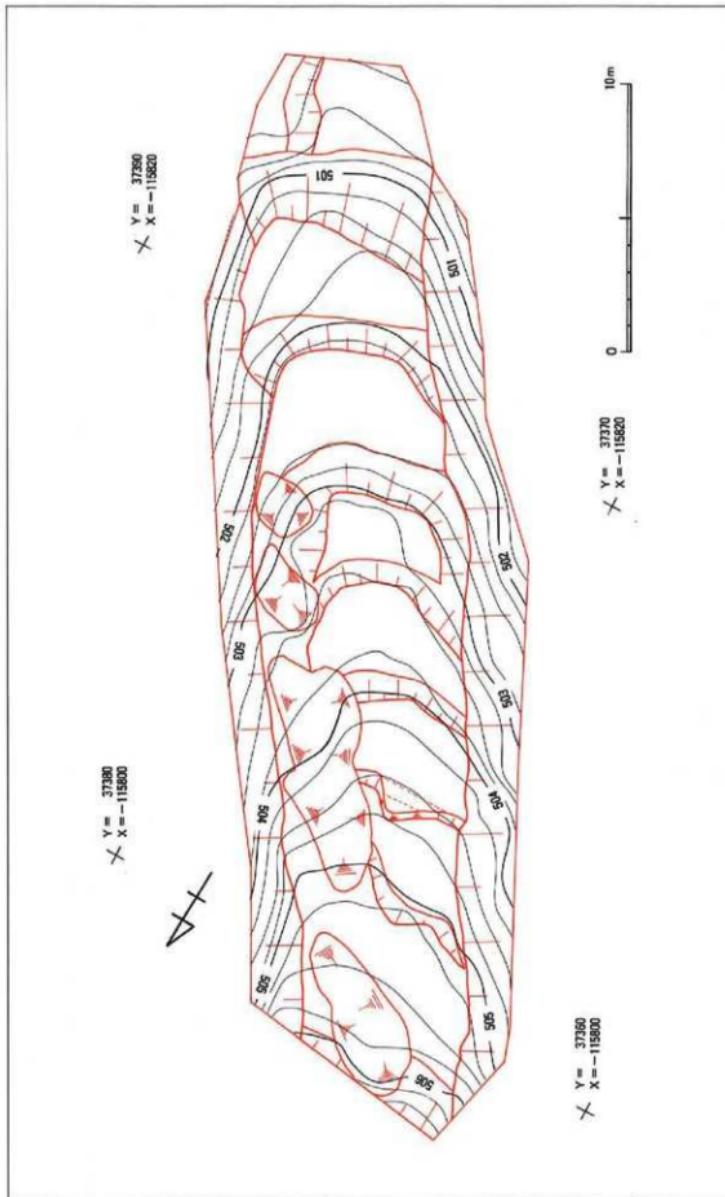


第8図 第8削平地実測図 (1:150)



第9図 削平地配置図・縦断面図・横断面図

第10図 基盤調査後地形測量図 (1:200)



IV. まとめ

今回発掘調査を実施した邑智郡瑞穂町の長源地本谷城は、文献等の記録や地元での伝承もなく、調査地が主郭部分から派生する尾根上の限られた部分であったので、山城の規模や構造の全容を明らかにすることはできなかった。また、調査により築廃城時期や築城者を明らかにする資料は得られなかつた。事前の分布調査や発掘調査の結果からも山城は小規模で堀切や土塁は設けられておらず、構造は簡略で當時大規模な兵力が駐屯した陣城とは考えられず、簡単な見張り所や砦跡と言えよう。

現在瑞穂町内には32ヶ所の山城や砦跡が確認されているが、それらの多くは未調査で、文献資料による検証もほとんどなされていない。このため瑞穂町域の中世武士団の動向についても詳細は不明であるが、今回の調査で得られた資料や僅かな文献を参考に長源地本谷城の構造や性格についてまとめておきたい。

長源地本谷城は20数段の小規模な削平地群からなり、これらの削平地は南側尾根に集中している。主郭部分は調査区外であり詳細は不明であるが、東西約10m、南北約40mの規模で、中心的な郭としては小規模である。また、主郭から南へ派生する削平地群も小規模である。調査により検出した削平地群の内最大は第6削平地の $6.5 \times 3.5\text{m}$ 、面積は 22.7m^2 、最小は第5削平地の $4.4 \times 2.5\text{m}$ 面積は 9.8m^2 であり、各削平地の面積は狭小である。削平地の造成は基本的には尾根筋に沿って地山を掘削し残土を東西方向に僅かに盛土し平坦面を確保しているが、各削平地とも南北方向には盛土は認められない。盛土層の観察からは複数時期にわたる造成も認められず、また、遺物や柵列、建物等の工作物や焼土などは全く検出されなかつた。

本山城跡は布施地区や宮内地区（大和村）から離れた山間の地にあり在地支配の機能を有した城とは言えないが、城の西側に布施地区から川本町へ通じる古道があり、また城の北側には宮内地区・村之郷地区から川本町へ通じる古道もあり、交通の要衝に立地している山城と言える。

以上のことから本城跡の性格について次のとおり推定できる。1. 城の南側方向を意識した山城である。2. 堀切や土塁等が設けられておらず、防備機能が極めて低い山城である。3. 城の規模



第11図 長源地本谷城縄張図（吉川正氏原図）

から兵站基地のような陣城ではなく、最前線の見張り所や砦のような山城である。4. 各平坦面は東西斜面に向かって僅かに盛土がなされているだけで、複数にわたる拡張工事等は認められず、極めて簡略で短期間使用されたと推定される山城である。

さて、木城跡についての文献等は見当らないが、布施地区一帯は川本町の温湯城を本拠地とする小笠原氏が領有していたと言われる。

陰徳太平記によると、永禄元年（1558）5月下旬笠取山（川本町）に毛利降元、吉川元春等が陣を張り温湯城を攻撃し、8月初旬には小笠原氏14代長雄（1547～1569）が毛利の軍門に下ったとされ、そのころまで布施・高原付近までその勢力を伸ばしていたことが毛利氏から出羽氏宛の知行状からも推察される^④。永禄元年（1558）の毛利氏の進軍経路は不明であるが、同年2月初旬の石州山羽合戦の経緯から、川羽→高原→布施→高取山の経路が推定でき、進軍の過程で布施地区では赤羽城や長源地本谷城となんらかの関わりがあったとしても不自然ではない。

これらのことから、長源地本谷城は16世紀中ごろ小笠原氏、毛利氏に関わりのあった見張り所や砦のような簡略な山城と言えそうである。

註

① 小笠原博氏のご教示による。

② 「川本町誌歴史編」川本町教育委員会1977年。

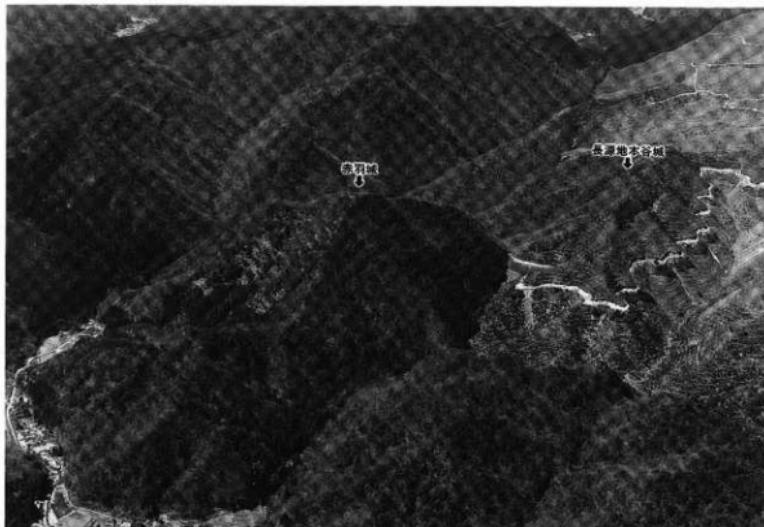
③ 『陰徳太平記』「卷之32小笠原放火付温湯城取囲事」「同小笠原長雄降參之事」。

④ 『萩瀬閻聞録』「卷43出羽源八」に収録されている毛利降元・元就より出羽民部人輔（元祐）への知行状から推察できる。

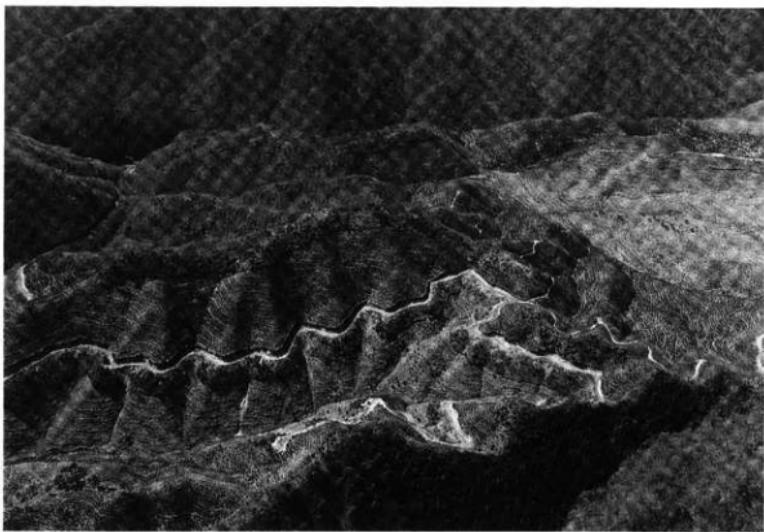
⑤ 『陰徳太平記』「卷之32石州出羽合戦之事」。

図 版

図版第 1



a. 長源地本谷城跡空中写真（南東から）



b. 同 (東から)

図版第 2



a. 長源地本谷城跡遠景（南から）



b. 同 近景（東から）

図版第3



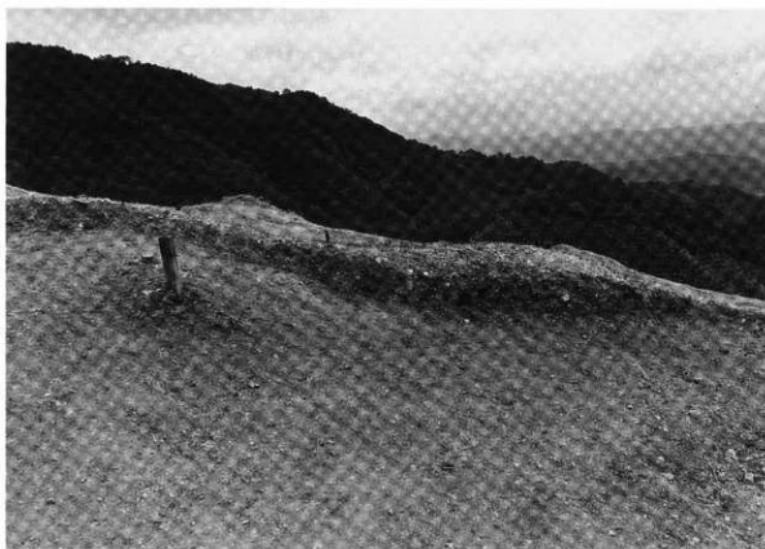
a. 調査前全景（北西から）



b. 同（南から）



a. 第1削平地（西から）



b. 第2削平地（同）

図版第 5

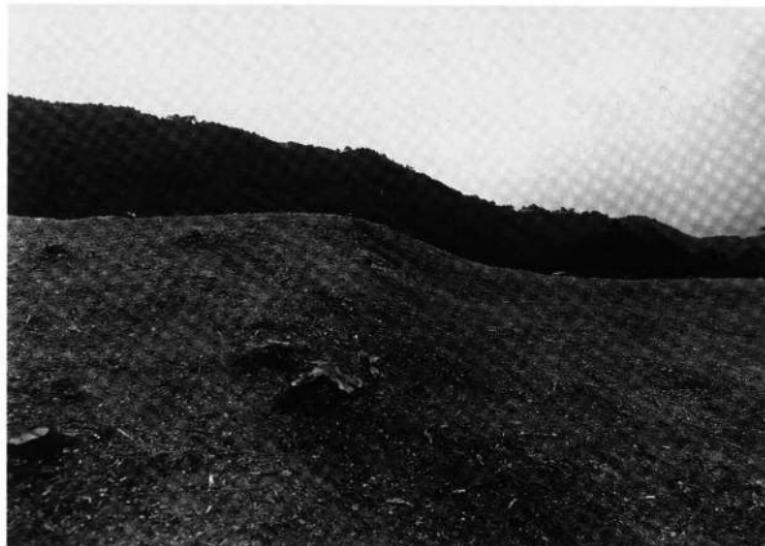


a. 第3削平地と第4削平地（西から）



b. 第5削平地と第6削平地（同）

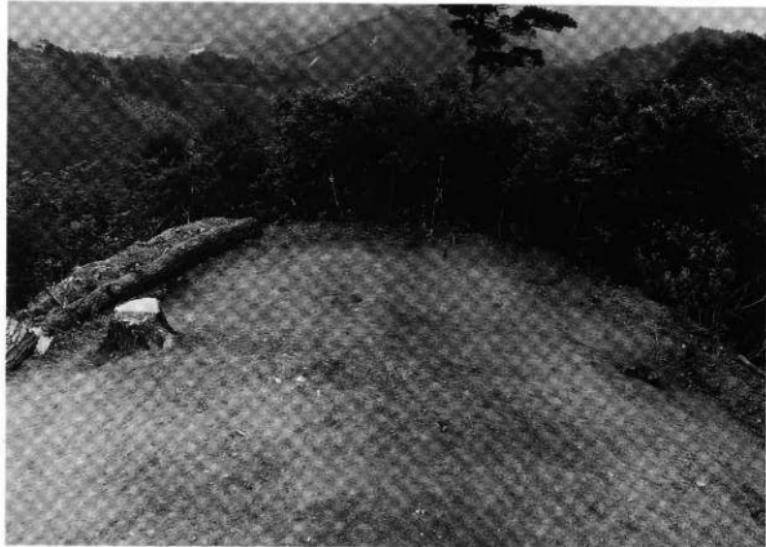
図版第 6



a. 第6削平地と第7削平地（西から）



b. 第7削平地と第8削平地（同）



a. 第 8 削平地（西から）



b. 完掘状況（南から）

図版第 8



a. 完掘状況（北から）



b. 第 6 削平地断割り状況（西から）



a. 長源地本谷城跡から赤羽城跡を望む（北東から）



b. 発掘調査風景

報告書抄録

ふりがな	ちょうげんじほんにじょうあと							
書名	長源地本谷城跡発掘調査報告書							
副書名	特別高压送電線路中国第二中幹線鉄塔建設工事に伴う発掘調査							
卷次								
シリーズ名	瑞穂町埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第20集							
編著者名	森岡弘典							
編集機関	瑞穂町教育委員会							
所在地	〒696-03 島根県邑智郡瑞穂町大字三日市32番地							
発行年月日	西暦 1997年2月							
所収遺跡名	所在地	コード			調査期間	調査面積m ²	調査原因	
		市町村	番号	北緯				東経
長源地本谷城跡	しまね おおち ろづほ やいらいし 島根県邑智郡瑞穂町大字八色石	32445		34度 57分 19秒	132度 34分 33秒	19960708～ 19960729	363	鉄塔建設
	じょうばら 字城平1229-1番地							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
長源地本谷城跡	山城	戦国時代	小規模な削平地	なし	遺物や柵列 建物跡等は 検出されな かった。			

平成9(1997)年2月5日

島根県邑智郡瑞穂町

長源地本谷城跡発掘調査報告書

特別高圧送電線路中国第二中幹線鉄塔工事に
伴う発掘調査

編集・発行 島根県邑智郡瑞穂町教育委員会
印 刷 柏 村 印 刷 株 式 会 社